

旭川医大 病院ニュース



(編集) 旭川医科大学医学部附属病院
広報誌編集委員会委員長
廣川博之

<http://www.asahikawa-med.ac.jp/> (附属病院)

希望を抱き新春を迎えて

病院長 石川 睦 男

病院職員の皆様、明けましておめでとうございます。新春を迎えて、昨年来の病院の評価と、今後の展望について述べさせていただきます。平成16年4月1日より、旭川医科大学は国立大学法人に移行し、当然のことながら、旭川医科大学医学部附属病院も従来にも増して経営が問われることになりました。国立大学病院のミッションは、法によれば「教育」「研究」「医療」であります。きわめて曖昧です。経営とは、単に収入、支出などの財政的側面だけでなく、国立大学病院としての使命を完遂させることが要求されます。今回、私は、国立大学協会の大学経営委員会の委員として、国立大学病院の経営問題アンケート調査を行いました。文教速報(11月17日)の調査結果の概要から、多くの学長は、附属病院の経営が大学の教育、研究に支障を及ぼすことは避けるべきであると考えていること、また全国42大学の大部分の学長は、その経営は大学のセグメントとして、他の部局とは明確に区別して自己完結的に運営すべきである、というものでした。一方多くの病院長は、法人化により、人事や、診療科の再編成などについては採算性を考慮するが、大学病院の使命を維持するため不採算部分を維持すると答えています。病院長は、大学病院の使命と採算性を両立させようと努力しているが、経営改善係数は大学病院の使命を大きく損なうと考えています。また、大学病院の経営については多くの学長と同じく、自己完結的になされるべきで、病院に積算された運営交付金の全額配布、人件費、物件費総額の病院長による管理など病院長の権限や、裁量権を認めるべきであるとしています。しかし、病院の管理会計指標として有用な限界利益などを用いていない現状です。

本院の状況は、昨年4月末よりようやく病棟の再開発が終了し602床として運用が可能となり、各診療科のヒヤリングにより、ベッドの配分が決定しました。さらに各診療科の本年度の目標値が設定され、各々の努力により、着実に実績が伸びて参りました。すなわち、病床の稼働率は目標を超え現在まで88%で推移し、在院日数も20日となりました。私は国立大学附属病院長会議の経営環境プロジェクトチームのメンバーになっており、全国42大学45病院の経営状況を知る立場にありますが、本院は前年度に比し、極めて高い実績をあげていることが分かり、改めて全職員に謝意を表するものであります。私は、病院の意思決定を迅速にすべく毎週の病院長補佐会議で病院に関連する諸問題を検討し、速やかに実行して来たつもりです。昨年10月からは全国に先がけて、携帯電話の院内使用可能にし、不便をかけていた休日の病院正面玄関の解放を12月4日より実施するなど、患者様の立場に立った医療を展開してきました。しかし、最も重要なことは、病院長就任の際に申し上げましたように、安全な医療であります。この理念のもとに特定機能病院として高度な先進医療を展開し、地域の最後の砦としての機能を有した病院にしようではありませんか。





教授就任のご挨拶

歯科口腔外科 松田 光悦

平成16年10月1日より、北進一名誉教授の後任として歯科口腔外科学講座を担当させて頂いております。

私は、昭和55年城西歯科大学卒業と同時に旭川医科大学医学部歯科口腔外科学教室に勤務し、今日に至っております。専門領域は、一般歯科診療および口腔外科診療全般であります。特に口唇裂・口蓋裂、口腔腫瘍、顔面外傷の治療と研究を専門に行っております。医学部における歯科口腔外科の役割を考えますと、口腔外科疾患患者の治療、医学部学生や研修医そして研修歯科医師の教育、さらに入院患者や職員の一般歯科診療などが挙げられますが、その目標は口腔疾患の予防や治療を通して咀嚼、会話といった口腔機能の改善を行い、口腔だけでなく全身の健康の保持・増進を目指すということであり、今まさに高齢化社会の真只中に突入してきて

おり、一般医科においても歯科医療においても、一人の患者がいくつもの疾患を保有しているという大変難しい時代になってきました。当科における有病者歯科治療の調査でも、年齢が増加するに従って一人の患者さまの有する疾患数も増加し、しかも多岐に渡るというデ・タが出ております。循環器疾患と歯科治療、抗凝固剤服用者の抜歯、糖尿病と歯周疾患の関係、各種移植医療と口腔感染症の関係等等、医療の現場で私ども歯科口腔外科が果たすべき役割は大変重要であると考えております。こういった観点から私は、「旭川医大歯科口腔外科は旭川・上川地区をはじめ道東・道北地域における『歯科と医科のパイプ役』である」という認識のもと診療や教室運営に最善を尽くし、本学の更なる発展に貢献するよう努力する所存であります。今後ともどうぞよろしくご指導、ご鞭撻のほどお願い申し上げます。

「口腔ケア外来」の開設

歯科口腔外科 竹川 政範

平成17年1月より、毎週月曜日、水曜日の午後、歯科口腔外科外来において、特殊外来の一つとして『口腔ケア外来』が開設されます。『口腔ケア外来』とは口腔衛生の改善のため口腔清掃を行うことですが、具体的には、歯石の除去、義歯の手入れや調整、抜歯を含む簡単な治療まで含められます。患者様によっては口臭チェック、摂食・咀嚼・嚥下訓練まで含められます。口腔ケアの目的としては、1．口腔疾患の予防、2．口腔感染巣から全身への感染予防、3．QOLの向上、4．高齢者の誤嚥性肺炎の予防などが挙げられます。対象は本附属病院を受診するすべての外来患者様と入院患者様で、具体的には1．人工弁など各種移植医療の術前・術後の人、2．化学療法前の人、3．麻痺のある人、4．意識障害のある人、5．嚥下障害のある人、6．口腔乾燥の強い人、7．口を開けてくれない

人、8．経管栄養を受けている人、9．気管切開を受けている人、10．無歯顎の人（歯のない人）、11．部分入れ歯の人、12．糖尿病の人などです。う蝕、歯周病、歯根嚢胞などの顎骨内病巣は、免疫能の低下した方では菌血症の原因と成り得るため、術前の口腔清掃が推奨されております。また、麻痺があったり口腔乾燥が強い、経管栄養管理や気管切開などで口を使わない方の口腔内は、かえって不潔な状態になっており、誤嚥性肺炎などの原因になるといわれております。口腔衛生状態が不良な場合種々の疾患を誘発するリスクが高くなります。患者様の全身の健康とQOLの向上のために、医科歯科連携のもと、総合的な治療が望まれます。

「口腔ケア」を希望される患者様、各科の担当医の方は、歯科口腔外科外来にお問い合わせください。

中日友好医院創立 20 周年記念式典に出席して

病院長 石川 睦 男

1997年来、名誉教授として手術指導、講演などで訪問して来た中日友好医院より、開院20周年式典の招待を受け、10月23日から北京を訪れた。中国の国内外から500人の招待客の晩餐会では、日本から、橋本龍太郎元総理大臣、阿南惟茂中国大使始め、日本国政府、医学会、産業界など多数の要人が出席していた。式典は、北京展覽館劇場に移り、2,500人の人々が集まった。病院長 許樹強教授のご挨拶では、開院20年で、ベッド数1,315床、外来1日約3千人、年間入院患者数2万人となり、2003年の春、猛威を振るったSARSの発生時には、中国でSARSの専門病院として、重要な役割を果たし、国内外から高く評価されたということであった。また、この病院は、日本の海外援助プロジェクトの中で、最も成功したものとして、JICAより“第1回国際協力特別賞”を受賞している。私が感心したのは、病院職員の努力により、医療レベル、接遇などから“外国人が選ぶ、満足度第一位の北京市内国有病院”に選ばれたことだった。

晩餐会の席で、橋本元総理にご挨拶する機会があり、旭川医大を誘致する折、場所の選定にあたり、

調整役をしたというお話を伺った。また、御挨拶の中で、ご自身が厚生大臣のときにこの病院の設立を決定したが、当初の理想である中医と西洋医学の協力による新たな医学の展開が必ずしも目的を達成していないと、形通りの祝辞の多い中で、厳しい指摘をされたことに感銘を受けた。沢山の祝辞の後は、すばらしい二胡の演奏などが3時間余りにわたったが、翌早朝の出発だったので、谷村新司の「昴」を聞いて引き上げた。



永年勤続者表彰

勤労感謝の日を前にして、平成16年度の本学永年勤続者表彰式が、11月22日（月）午後4時から事務局第二会議室で行われました。

表彰式は、部局長及び所属長の列席のもとに行われ、学長から被表彰者全員に対し表彰状の授与並びに記念品の贈呈が行われました。

次いで、学長から永年にわたり本学の発展、充実に尽力されたことに対する、感謝とねぎらいの挨拶があり、これに対して被表彰者を代表して内科学第三講座の 後 裕教授から、謝辞が述べられました。

なお、被表彰者は次の方々です。(敬称略五十音順)

- 大崎 能伸 (第一内科)
- 小澤 雅 (会計課)
- 九鬼 智子 (看護部)
- 工藤 友絵 (外科学第二講座)



- 高後 裕 (内科学第三講座)
- 坂本 尚志 (入学センター)
- 千葉 茂 (精神医学講座)
- 千葉 伸一 (附属実験実習機器センター)
- 中西 康晴 (施設課)
- 橋本 博 (泌尿器科)
- 長谷部直幸 (内科学第一講座)
- 畑中 亜紀 (看護部)
- 増田 憲昭 (放射線部)
- 松田 光悦 (歯科口腔外科学講座)
- 山村 賢司 (経営企画課)
- 山村 靖恵 (産婦人科学講座)
- 山本 和恵 (総務課)

医学教育等関係業務功労者表彰

文部科学省の平成16年度医学教育等関係業務功労者表彰式が、11月22日（月）に東京のフロラシオン青山で挙行され、表彰状及び副賞の授与が行われました。

今年度は、功労者91名が表彰され、本学からは、看護関係業務に尽力された2名が表彰されました。

(敬称略)

- 坂下 和子 (看護部)
- 多田 洋子 (看護部)

(総務課)

各部門における安全への取り組み報告会 (ポスターセッション) を終えて

事故防止啓発部会責任者、精神医学講座教授 千葉 茂



▲病院長賞を選考中の石川病院長(左)と上田看護部長(右)

医療事故の防止は、本学附属病院の最重要課題の1つであります。医療事故防止対策委員会の中にある事故防止啓発部会は、平成12年度より組織され(初代部会責任者:北進一名誉教授)今年で5年目を迎えております。啓発部会では、医療安全に関する研修活動として、これまでに新規採用された医療スタッフに対する研修会、ビデオ研修会、事例検討会、医療安全に関する講演会、「各部門における安全への取り組み発表会」などを開催してまいりました。

とくに「各部門における安全への取り組み発表会」につきましては、昨年からはポスターセッション形式でご発表いただき、有り難いことに皆様から好評をいただいております。本年度の発表会は、院内の20部門における取り組みについて、平成16年11月29日～12月2日の4日間、看護部多目的室において開催されました。参加者数は延べ513名に上り、本学職員はもちろん医学生・看護学生も出席していました。また、横浜市立大学医学部附属病院の専任リスクマネージャー小池博文先生がこのポスターセッションの見学のためにわざわざご来旭され、「このような取り組み発表会は全国的にもめずらしく、価値がある」とお褒めいただきました。

さて、今回のポスターセッションから、最優秀ポスター賞である「病院長賞」を設立し、石川睦男病院長にその選考をお願い申し上げることになりました。第1回の病院長賞は、集中治療部ナースステ-

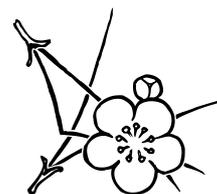
ションの「事故発生時においてリアルタイムで対処可能なフローチャート作成の効果」に決定いたしました。受賞された皆様に、心からお祝い申し上げます。なお、その他の部門のポスターについても、非常に意義深い取り組みがなされていたことを申し添えます。

申し上げるまでもなく、本学附属病院で働いている医療スタッフは、確実に医療事故を防止しながら質の高い医療を目指さなければなりません。また、時には患者様のご理解やご協力をいただかなければならないこともあります。このような意味から、医療現場において「安全文化」を育てることが重要であると思われまます。私どもの事故防止啓発部会の活動が、このような「安全文化」を醸成するための一助になれば幸いに存じます。

今後とも、皆様からのご指導ご鞭撻をいただきますよう何卒よろしくお願い申し上げます。



▲ポスターセッションの様子



駐車場のゲート化について

駐車場問題ワーキンググループ委員長 坂本 尚志

このたび本学構内の駐車場がゲート化されることにつきましては、既にご案内済みのことと思っておりますが、同時に有料化されることになり、いろいろご不満も多いことと思っております。これまでの経緯についてご説明いたしますと共に、ご協力をお願いいたしますと思っております。

駐車場のゲート化および有料化は、5月の役員会および経営協議会で決定されたことで、7月および10月の教授会で報告がありました。駐車場問題ワーキンググループには、実際の運用要項および要領の作成および患者様を含めた利用者への周知について、事務局と共に検討するよう下命されました。

最初にゲート化に至るまでになった本学の駐車環境についてご説明したいと思います。

本学の駐車場は平成16年9月の時点で982台を有しており、うち325台は来院者用、97台は学生用、職員用は560台となっております。通勤手当を支給されておりかつ2km以遠の職員等に対する許可証の発行枚数は898枚で、160%の発行率です。

しかしながら、交替制勤務の職員や、兼業、非常勤講師等で不在となる職員、常時来学しない研究生等がおりますので、学部側の駐車場は学生等の不法駐車がない夏季休業や冬季休業の期間は、路上駐車等の違反をすることなく、利用可能でした。一方、病院側の駐車場は近年委託業者への業務外注が増加し、発行率が高くなってまいりました。加えて近隣住民や、学部側の取締り逃れの学生の違法駐車、来院者用駐車場に駐車する職員等が後を絶たないため、来院者の方が駐車できない状態になってまいりました。身障者用スペースさえも、占拠され、患者様

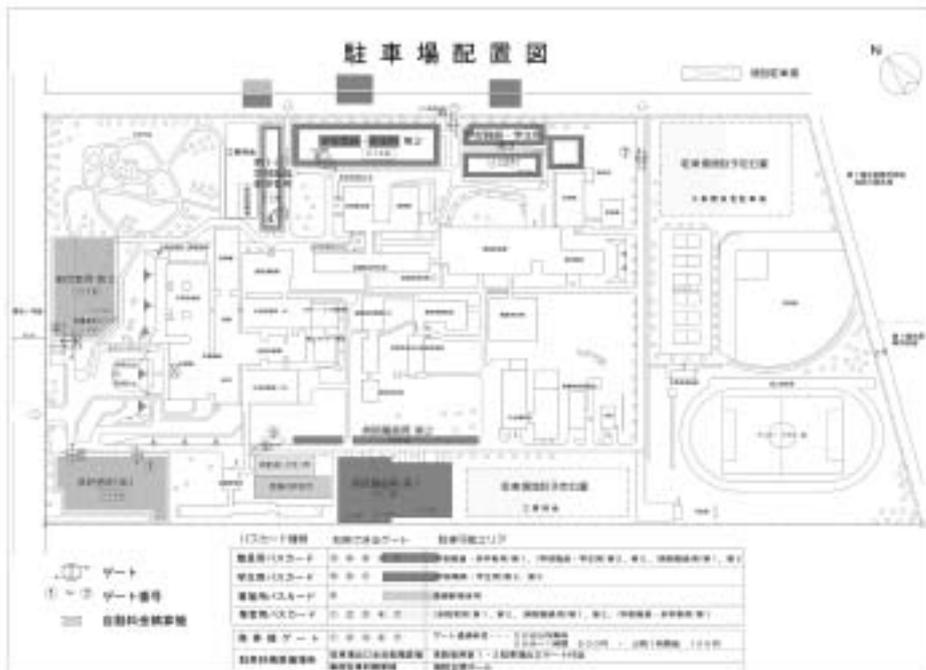
から度々苦情が参っております。委託業者による整理員も配置いたしておりますが、違法駐車の高さに対応できない状態でした。患者満足度調査でも駐車場への苦情・要望が常にトップクラスで挙げられているところです。これまでワーキンググループでは毎年利用要項を定めて、職員および学生に通知してご協力を依頼してきました。しかしながら、無許可で来学する学生や職員には悲しいことに効果がなく、要項を遵守されている方々からの苦情が後を絶ちませんでした。

今回の駐車場ゲート化および駐車場の増設は、このような構内の駐車環境を改善し、患者様等への利便性とサービスの向上を第一とするために経営協議会で決定されたものです。

駐車場増設に関しては、今回第一期計画として4か所の増設を行い1214台分増設し、1196台といたしました。この整備には7700万円の経費がかかっております。最終的には1500台分の駐車スペースを確保する予定です。今後、更なる駐車場の増設、冬季間の除雪、ゲートの維持管理、整理要員等にかかる経費を賄うことが必要なために、同時に有料化することが経営協議会で決定され、既にご案内した料金が設定されました。

有料化を伴っておりますので、許可された職員の皆様の駐車スペースの確保を確認したいところですが、これまで違反車両を完全にシャットアウトした状態でどの程度の利用があるのか、現在のような出入り自由な状態では完全には把握できません。現在進行中の病棟改修工事に伴う工事現場の設置等のため構内通行規制もあり、臨時駐車スペースの確保を検討しております。

朝のピーク時には、駐車場へ入構する車両が多く、今後混雑も予想されます。駐車場管理を委託する業者の方では、整理要員を増員し混雑を解消するよう努めるとのことですが、導入当初は多少の混乱も予想されます。どうか、患者様をはじめとする来院者の方々への利便性とサービス向上を第一に、職員の皆様のご理解、ご協力をお願いいたします。



調理技能コンクール

銀賞受賞



栄養管理室 調理師 渡邊 淳

私は、旭川調理専門学校を卒業して、株式会社ニュー北海ホテルに入社。洋食部で8年間勤務し、後に市立旭川病院（シダックス）で初めて給食調理に携わりました。そこで3年間の経験を経て、平成16年4月に旭川医科大学病院に就職し現在に至っております。

平成16年10月3日（日）「平成16年度 第41回調理技能コンクール」が札幌天使大学にて行われました。以前にも推薦して頂き出場した経験があり、今回が3度目の挑戦となりました。

テーマは、病院給食で「北海道食材の鮭を生かした和、洋、中を盛り込んだ実用的なオードブル」というもので午前11時25分競技開始。焦りと緊張の中での50分の作業は普段の調理作業とは全く違い思い通りには進まず、今までの経験を十分に発揮するにはあまりにも短い時間でした。材料の鮭切り身を開いて挽肉を詰め蒸し器で蒸し「手鞠」のようにし、蕎麦を油で揚げてすだれにしたものを飾りました。

一番手がかかったのは鶏肉の巻物で、肉の厚さや

中心に具を巻かないと切った時に見た目が悪いからです。

審査員は、学識経験者1名、技能経験者3名、計4名

審査内容

- 1) 包丁類の手入れ状況・調理材料の衛生的取り扱い及び後始末状況
- 2) 調理技能が充分発揮され、商品価値を高めているか
- 3) 味覚をそそる色・艶がだされているか
- 4) 与えられた材料を十分に活かしているか
- 5) 盛りつけ・形などが実用的で業務に役立つか

結果は銀賞ではありましたが北海道知事から賞状とメダル、調理師会から賞状と盾をいただき銀賞以上の経験をさせて頂きました。これからもこの経験を生かし日々勉強に励み、患者様に少しでも喜んで頂ける安全でおいしい食事を作っていきたいと思っております。

北方四島の医療関係者が 本学視察のために来学

9月2日・3日に北方四島交流事業、いわゆるピザなし交流事業の一環として、択捉島のロシア人医師及び看護師の4人が視察のため本学を訪れました。

当初は10人の訪問を予定していましたが、台風16



号による悪天候の影響で6人の医師及び看護師が乗船できず、4人の訪問となりました。

1日目は、大学の研究施設及び看護学科の視察、看護教育の違いなどについての懇談が行われました。

2日目は、附属病院で担当の医師、看護師等の説明により遠隔医療センター、改修後の病棟、手術室などの視察を行い、高度先進医療の現場に驚きの様子でした。最後に、本学の医師及び看護師との懇談会が実施され、医療事情の違いなどについて懇談が行われました。

今後、北方四島から患者の受入れが予想され、本院の役割が大きくなることと思われる中、関係者のご協力により視察日程を終えた一行を見送ることとなりました。

（総務課）

【薬剤部】

副作用情報 (45)

静脈注射による血管痛・静脈炎

静脈注射による血管痛は、注射薬によって血管内膜の内皮細胞が損傷を受けることによって生じる。薬剤の刺激によって局所に炎症が発生し、炎症部から遊離したプロスタグランジン E₂ やロイコトリエンなどによって血管透過性が高まり血漿成分が血管外へ漏れ、赤く腫れて発熱し痛みを伴う。この状態が持続すると、損傷部位に血小板が凝集し血栓が生じ、慢性的な静脈炎の状態となる。薬剤に起因して発生するもので、化学的静脈炎と呼ぶ。

静脈注射による血管痛の原因の一つとして、薬液の pH があげられる。pH が 8 以上あるいは 4 以下の時に、特に静脈痛・静脈炎の発生リスクが高まる。

従って、生理的な pH 範囲外の薬剤を投与する際には、薬剤の希釈を充分に行なうなどの投与方法の工夫を考慮すべきである。pH 以外に、薬剤の浸透圧も考慮する必要がある。血液の浸透圧は 280～295 mOsm/L であり、薬液の浸透圧がこれより大きく異なると血管痛や静脈炎を起こす。例えば、アミノ酸製剤は血液に対して浸透圧が 3～6 倍高く、そのままでは静脈内膜を損傷しやすい。薬剤の浸透圧は、化合物や溶媒により様々であり、希釈液により等張液に近づけることが重要である。十分に希釈できない場合には、薬液が血液で希釈されるようにゆっくりと投与すべきである。注射液の最終 pH と浸透圧を考慮することが、静脈炎の予防上重要となる。

血管痛、静脈炎の発症時には、症状に応じてステロイド製剤の静脈内投与が有効である。血栓の形成が考えられる場合は、ヘパリン製剤の投与も検討する。感染時には、穿刺部の消毒とルート交換を行う。

(薬剤部 研修生 伊藤 拓)

輸血部発 ③

輸血後肝炎はなくなるらない!?

2004年11月28日、北見市で E 型肝炎の集団発生がおり、そのうち 1 名が劇症化して亡くなったことが報道で明らかになった。丁度、その 1 ヶ月前の 10 月 28 日には、道内で 2 人目の輸血が原因とされる E 型肝炎患者の発生が新聞に掲載された。日赤はこの原因となった血液の供血者に HEV 感染者であることを情報提供し、その際に供血者の父親が E 型劇症肝炎で亡くなったことを知った。この事実は厚生労働省に報告され、同省ではこの件に関し疫学調査を行い、11月28日報道の E 型肝炎集団感染の原因は生焼けの豚レバーやホルモンを食べたことによるものと推定した。

輸血後肝炎発生を防止するため、1972年に HBs 抗原検査が、1989年には HBc 抗体検査、HCV 抗体検査が、1999年には HBV、HCV の核酸増幅検査 (NAT) が導入され、輸血後肝炎の発生率は 1970 年前後の 16.2% から、2000 年の 0.0004% (推計) にまで低下し、輸血用血液の安全性は格段に高まった。しかし、ウィンドウ期の供血者から採血した場合には、ウイルス混入血液が出荷される可能性はいまだゼロになっていない。

今回の輸血による HEV 感染は既知のウイルスである HEV のスクリーニング検査が行われていないために発生したものとも考えられるが (たとえスクリーニングが行われていてもウィンドウ期であれば予防は不可) 現在知られていない未知のウイルスや、vCJD (変異クロイツフェルトヤコブ病) の原因であるプリオンが血液を介して感染する可能性は否定できない。

一生懸命治療して癒ったはずの患者さんが、輸血による感染症で次なる不幸を背負わないように、同種輸血を行う際には適応を厳格に決め、本当に必要な場合にのみ行うよう心がけましょう。

(注) 現在、日赤では北海道に限り、献血者が感染源となるシカや豚の生肉を食べたかどうか問診し、疑いの強い血液は HEV の NAT 検査を行うことにしている。

(輸血部副部長 紀野修一)

病院職員「生涯教育プログラム」 第 1 回講演会の開催について

生涯教育検討委員会では、中期目標・中期計画に基づき、今年度から病院職員を対象に「生涯教育プログラム」を実施することになりました。この「生涯教育プログラム」は、「患者の安全」「医の倫理」「患者サービス・接遇」「患者の尊重」「プライバシー」「情報の扱い」「病院の経営戦略」などの分野の専門家を講師に招き、病院職員のより一層の資質の向上を目的として講演会を開催するものです。

その第 1 回講演会が去る 11 月 11 日、日鋼記念病院



経営管理部長 林茂氏をお招きし、「民間病院における医療サービスの改善活動」と題して開催されました。林氏は、同病院での実績を基に、安定した病院運営や職員の士気向上のために行った方策などについて、失敗例も含めユニークで分かりやすく講演され、(財)医療機能評価機構が実施する病院機能評価の認定第 1 号病院に相応しく、先進性を感じさせる内容となりました。

当日は、職員、学生など約 200 名の参加者があり、病院運営に積極的に係わることの大切さ、病院に勤める者としての心得、そして医療サービスの更なる充実の必要性などについて再認識する良い機会となりました。

なお、講演の様子はビデオに撮影しましたので、貸出しを希望される方は総務課企画係(内線 2135)へお申し込みください。

引き続き、第 2 回講演会の開催を準備していますので、多くの皆様のご参加をお待ちしています。

(総務課)

平成 16 年度 患者数等統計

区 分	外来患者数			一日平均 外来患者数	院外処方 箋発行率	紹介率	入院患者 延数	一日平均 入院患者数	稼働率	前年度 稼働率	平均在院 日数 (一般病棟)
	初 診	再 診	延患者数								
7 月	人 1,376	人 22,937	人 24,313	人 1,157.8	% 62.49	% 54.14	人 16,704	人 538.8	% 89.51	% 70.95	日 20.30
8 月	1,369	23,152	24,521	1,114.6	62.90	54.86	16,618	536.1	89.05	69.69	20.21
9 月	1,256	23,008	24,264	1,213.2	62.25	54.86	15,979	532.6	88.48	70.42	21.92
計	4,001	69,097	73,098	1,161.9	62.55	54.62	49,301	535.8	89.01	70.35	20.81
累 計	7,760	135,289	143,049	1,153.6	61.58	53.71	94,229	514.9	85.53	78.85	20.72
同規模医科大学平均	8,601	109,983	118,584	945.5	74.55	49.44	94,771	517.9	85.32	85.23	22.13

稼働率は、承認病床数(602床)により算定している。

(経営企画課)

編集後記

先日友人が私に、知人が野口英世賞を受賞してその受賞祝いに駆けつけた話をしていただき、その日が偶然にも新札が発行される日で、野口英世先生が新札のニュー・フェイスとして登場したので、二重の喜びで会が盛り上がったそうです。ところで、それまでの新札といえば、二千円札ですが、覚えていらっしゃるでしょうか? いったいどのくらいの頻度で二千円札をこれまでに手にしたのでしょうか? ひょっとすると、そんな物もありましたねと思っている方も少なくないのではないのでしょうか。手にしたうちの半分以上は、おそらく某コンビニの ATM でお金を下ろしたときのものではないのでしょうか。一万円以下の単位は、極力二千円札で出す仕様になっていたらいいです。今でも、出るのでしょいか? 新紙幣は、まだ手にしたことがありませんが、景気回復と偽札防止の為に新札と聞いています。カード時代に既に突入してきた日本でどれほど新札が必要なかわかりませんが、少なくとも大金を持ち歩く人が最近はめっきり減ってきていると思います。以前、テレビで某電気会社の社長が現金をア

タッシュケースに入れて持ち歩いている姿が放送され、何度か強盗に遭遇したそうです。物騒な世の中になってきています。カードも診察用カード、キャッシュローンカード、レンタルビデオカードなどお財布に入りきれないほどたくさん持参しているのが現状だと思います。是非、病院では一枚のカードで全ての情報、キャッシュ機能が盛り込まれたものを開発していただき、簡素化して頂ければ、患者さん方が重たいバッグや財布を持ち歩く必要が無くなって、より快適な通院、入院生活になるのではないのでしょうか?

(第二外科 河野 透)

時事ニュース

- 9 / 27 ビデオ上映会
- 10 / 1 携帯電話使用解禁
- 10 / 27 選択メニュー 週 4 日に拡大
- 12 / 10 精神病院実地指導